

孫子

『孫子』は、紀元前6世紀ころの兵法家・孫武^{そんぶ}の兵法書です。それまでの戦いが、職業軍人を中心とした比較的小規模な戦いであったのに対し、孫武のころは、農民を歩兵に仕立てて十万人規模の軍を編成し、国の存亡をかけた戦いになることもありました。戦いに負ければ民や国土を失い、勝っても国財を消耗し次の戦いで不利になることから、『孫子』の一節の「百戦百勝は、善の善なる者にはあらざるなり。戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり」に代表されるように、無用な戦いを避けて目的を達成することを第一としており、そのためには、「兵とは詭道^{きどう}（敵をだます）なり」のように、手段を選びませんでした。それまでの兵法書が、戦いの日時を占いで決めるような、非合理的な内容であったと思われるのに対し、『孫子』は非情なほどに合理性を追求した内容となっています。

『孫子』は今でも高い評価を受けているのですが、『火攻篇』にある星座と風の吹く日の関係を解説した「起火有日。時者天之燥也。日者宿在箕壁翼軫也。凡此四者、風之起日也。（火を起すに日有り。日とは宿の箕・壁・翼・軫に在るなり。凡そ此の四者は、風の起日なり）」の記述は不評です。この部分を明確に解説したものはなく、古い時代の迷信としたものなど、否定的な解説が目立ちます。

『火攻篇』のおおよその意味は、次のとおりです。

火攻の対象は、兵士(火人)、物資(火積)、輸送車(火輜)、倉庫(火庫)、橋・棧道(火隧)の五つ。事前に準備し、乾燥した日に行う。太陽が星座の“箕壁翼軫”に位置する季節に、火攻に適した風が吹く。

内通者や作業者が敵陣内に火を放つのに合わせ、すばやく外からも攻める。ただし、事前に情報が漏れて逆用されることがあるため、敵陣が静かなときには、様子を見る。風が強くと、敵陣の外から火を放つことができるようであれば、敵陣内での火を待たずに、火を放って攻撃する。風上で燃えているときには、風下から攻めてはいけない。昼に風が強くと、夜は風がおさまる。守備にあたっては、火攻の五つの攻撃法を熟知し、その対策を講じることが重要。

火攻めに適した日は、『火攻篇』に「時者天之燥也（時とは天の燥けるなり）」とありますので、好天が続いた後、強い風が吹く日と思われます。強い風が吹いても、台風が接近したときのように、前日や当日に雨が降ると、火攻めはできません。また、事前の準備に時間を要すると思われるため、強い風が吹く兆候があるか、あるいは、数日間吹き



▲『孫子』火攻篇

つづけることも条件になりそうです。

この「日者宿在箕壁翼軫」の記述、実は季節を表しているのです。「箕壁翼軫」はそれぞれ“二十八宿”と呼ばれる星座のひとつで、“箕”は天球の東北に位置する射手座、“壁”は西北に位置するペガサス座、“翼・軫”は東南に位置するコップ座・カラス座に相当します。

太陽は一年で天球を一周しますので、太陽のある星座で季節がわかります。太陽が“箕”に位置する立冬から冬至のころは、日本で“木枯らし”が吹く季節です。なお、冬至を過ぎて寒さが厳しくなると、中国大陸は寒冷な高気圧におおわれて風の弱い安定した天気になり、また、雪も降り積もるため、火攻めが難しくなります。“壁”の立春から春分のころは、“春一番”が吹き、中国内陸部からの黄砂の飛来も多い季節です。“翼・軫”の立秋から秋分のころ、台風が東シナ海を北上することがあります。このとき、台風の進路の西側に位置する中国では、雨が降らないで、強い風だけが吹きます。

これらは、中国北部沿岸部の気象を表現しているようです。孫武は呉王の闔廬に仕えたのですが、『孫子』の風の吹く日の記述は、“呉”（揚子江下流）の気象ではなく、孫武が生まれ育った“齊”（山東半島付近）近郊の気象を基に書かれたことがわかります。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 **松嶋 憲昭**